

「花櫻をる少將」における語彙：小弓・その他

春日，和男

<https://doi.org/10.15017/2332891>

出版情報：文學研究. 51, pp.1-11, 1955-03-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



「花櫻をる少將」における語彙

——小弓・その他——

春 日 和 男

*

堤中納言物語十篇の小話に見られる種々なる先行文芸の影響などといふ事は、讀んだ人の多くが一再ならず逢着した問題であらうし、それはこの物語に関する限り極めて初歩的段階に属しながら、しかもかなり重要な事項でもあらうと思はれる。事実、この方面に関する研究は早くから多くの先学諸家により手がけられて来た所であつて、例へば「このついで」における三つの体験談はサロン文学の典型として、まさに源氏物語帯木巻の雨夜の品定に準拠したものであるといはれ、又女房小式部の作であることが判明した問題の「逢坂越えぬ権中納言」における主役、権中納言は源語の薫君その人の焼き直しであると見られ、更に有名な「虫めづる姫君の」のヒロインは軒端の萩を撰したものとさへ考へられてゐるが如きはその主なる結果に他ならない。

こゝにとりあげた「花桜をる少將」も又その様にして考へられて来た一篇である事は今更云ふまでもない。この短篇（以下略して「花櫻」と呼ぶ。）は彼の「逢坂越えぬ権中納言」と共に所謂、複式構成の物語であつて、その一部が源語的色彩、乃至はその他の王朝文芸的趣味の濃厚なものであると認められてはゐる

が、内容がやゝ雑然としてゐて、かなり難解な点が少くない。併しながら一般にこの「花桜」が三部からなつてゐると見なされてゐる事は誤りではなからう。即ち、第一に主人公の少將（内容及び風葉和歌集の記事により中將と見るのが正しいやうであるが、こゝでは暫く少將のままにして取扱ふ。）が春の未明、情人の家を辞しての帰途、垣間見た幼き姫君とそれを取巻く数人の女房・童の世界、第二に後朝文の贈答及び源中將・兵衛佐の来訪、詠歌（前半）、及び夕方殿の屋敷における管絃の遊び（後半）、第三に姫君奪取に至る経緯及び失敗といふことになる。この中で第一と第三の部分は構想の上に一往の連なりを保つてはゐるが、中間の第二部、特に前半はその埒外に立つ不用の部分であるし、その第一と第三の部分にさへも、なくもがな的人物や事件がくどくしく物語られてゐる感が深い。これは一方では複式構成の物語における特色といへばそれまでであるが、他方これこそ先行文芸の摸倣及び摂取といふ動かすべからざる因子の存する所以であらうと思ふ。その一つとして早く藤岡作太郎博士によつて指摘された如く、第一部と第二、第三部における文体の不統一（自叙体の混乱）、殊に敬語の用法の精粗といふ事実も存する。

「花核」の書き出しは短篇小説として実に卓抜であると賞揚される反面、無駄の多いこと、不統一な点などがあつて、かなり間の抜けた感を与へてゐる事も否み得ない。むしろ同じ複式構成とはいへ「逢坂越えぬ権中納言」よりも、更に甚だしく欠陥の目立つものであり、端的にいへば「花核」をる少将は体裁一致せずして⁵⁾わろ」き部類の物語でさへある。

この欠陥とは作者が先行文芸の踏襲にあつて、構想上に一貫性を持たせ得なかつた事に起因するもの、つまりは部分的剪裁による寄木細工であることである。この結果が至る所に不可解な辞句（語彙）を將來した。近來解釈及び研究の業頓に進んだとはいへ、なほ未解決のまゝなるものが残されてゐる。標題に掲げた語彙といふのは別に國語学的処理を意味するものではなく、その様な一見不可解な、あるいは特徴ある二、三の辭句のことであり、それを通して寄木の一片をも明かにし得ればとの望みを托してゐる訳のものである。

先づ「花核」において他の文芸作品がいかに模倣あるいは撰取されてゐるか、今先学諸家によつて説かれたものの中で直接文字面にはあらはれた所を左に掲出して見る。「花核をる」といふ題名そのものが既に問題になり、従来も躬恒集・赤染衛門集さては狭衣物語卷四上等に見える歌を以てする人があるが、こゝでは姑く触れないでおくことにする。

(1) 月にはかられて夜深く起きにけるも……

明けぬれば夜深う出で給ふに有明の月いとをかしう花の木どもやうく盛り過ぎて僅かなる木蔭のいとおもしろき庭にうすく霧り渡りたるそこはかたなく霞みあひて秋の夜のははれにたちまされり。（源氏須磨——清水泰氏「堤中納言物語」國語國文二一八号）

(2) はやくこゝに物いひし人ありと思ひ出でてたちやすらふに築地の崩れより白きものいたうしはぶきつゝ出づめり。……この有りつる者の返るよびてこゝに住み給ひし人は未だおはすや山人に物聞えむといふ人ありと物せよ……

こゝにありし人はなほやながむらむ……簾うごく氣色なり。僅かに見つけたる心地恐ろしくさへ覚ゆれど寄りて声づくれればしはぶきを先に立てゝいと物たりたる声にて……（源氏蓬生——山岸徳平博士評解）

ね泣きがちにいとゞ思しつゝみたるはたゞ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見え給ふ。……（源氏末摘花——同右）

(3) すいがいのつらなるむらすゝきのしげきかたにかくれて見れば……

すいがいのたゞすこし折れ残りたるかくれの方に立ちより給ふに……（同右）

(4) 月のあかき方に扇をさしかくして「月と花とを」と口ずさみて……

いと若うをかしげなる声のなべての人とは聞えぬにて臘月夜に似るものぞなきとうち誦じてこなたさまに來る……（源氏花宴——土岐武治氏新釈）

(5) よべは何処に隠れ給へりしぞ内裏に御遊びありて召ししかど

も見つけ奉らでこそ。

夜べも御遊びに長く求め奉らせ給ひて御氣色あしく侍りき。

(源氏夕顔—同右)

(6) 夕方殿にまうで給ひて暮れゆくほどの空いたうかすみこめて……琵琶を黄鐘調にしらべて……

日暮れぬればみなほりぬるにいっしか夕月夜さし出でて……さまぐの御琴どもみすの中より出させ給へば……(狭

衣物語四上——倉野憲司博士・土岐武治氏)

(7) みつすゑが車にておはしぬ。わらはけしきみありきていれたてまつりき。火はもの後へ取りやりたればほのかなるに……

我が車にてみて奉る。(源氏空蟬——村上忠順書き入れ)

戸放ちつる童も、其方に入りて臥しぬればとばかり空寝して火明き方に屏風をひろげて影ほのかなるにやをら入れ奉る。

(源氏空蟬——土岐氏新釈)

几帳を障子口に立てて火はほの暫きに見給へば唐櫃だつ物も置きたれば……(源氏帚木——村上忠順書き入れ)

(8) うち臥し給へるをかき抱きて乗せ奉りて車をやるに。こは何ぞ、何ぞとて……

あな心うまろも同人ぞとてかきいだきて出たまへばだいふ小納言などこはいかにときこゆ。(源氏若紫——同右)

一 体先行文学の撰取にあつては、直接に辞句をそのままに襲用する場合と、その大構を巧みに取入れる場合とがあつて、一概にいへないが、右に掲げた八つの部分はその当非はともかくとして、辞句の上に極めて相近いものを感じさせる所、つまりは不消化な撰取の部分であらう。(1)は源氏須磨流謫にあたり左大臣邸を

辞する場面、(2)は源氏明石より帰京後末摘花の荒廃した邸を訪ふ場面、(3)は源氏頭中将と末摘花を挑み合ふ場面、(4)は源氏朧月夜内侍と出会ふ場面、(5)は源氏夕顔の死後、頭中将等に会ふ場面、(6)は狭衣大将等桜咲く齋院の庭に蹴鞠の後管絃に移る場面、(7)は源氏空蟬の寝所に侵入する場面、(8)は源氏紫上を奪取する場面である。この中最も構想上から深く喰ひ入つてゐるのは(6)であり、情緒表現としては(2)及び(3)であらうと思はれ、他は断片的な相似の形と見られる。

さて、王朝の物語に限らず、文学に現れた環境は多かれ少かれその時代の実生活の表現であるから、一つの場面に相似の形があるからといって、それを直ちに摸倣又は影響として片付けてしまふ態度は甚だ単純であつて、誤解を招く危険が多分にあることは否み得ない。その様な欠陥を補ふ意味から、特殊な語彙を通して考察することは所謂先進の文学の不消化な撰取に終つたこの種作品にとつては、殊に必要な事ではないかと考へる。

例へば第一部に出て来る最も難解なる辞句に「かのみつとをにあはしや」がある。この解釈には種々なる説があるが、「かの」(彼の)といふ指示の仕方から考へて「光速といふのはこの時代の物語中の人の名であらう。」とした全釈王朝文学叢書巻一の頭注、又は「当時あつた物語の主人公の名か。」とした佐伯梅友先生(新註國文学叢書)の御説に従ふのがよいのではなからうか。つまりこの様な辞句の末にまで先行文学の影響を觀取するといふ解釈方法をとるのである。

又「やま人に物聞えむといふ人あり」の「やま人」等もその類ひであらう。この語は

あしひきの山行きかしば山人乃われに得しめし山土産ぞこれ

二〇、四二九三、

あしひきの山に行きけむ夜麻妣等能こもろも知らず山人夜多
乳
二〇、四二九四、

等万葉集にも見え、代匠記初稿本に「山人とのたまへるは仙人の事なるべし」(四二九三)といひ、精撰本で「山人トハスナハチ太上天皇ナリ。…玉体ヤガテ仙人ニシテ山ニ御幸シタマフ御心モハカリカタクテ知ラレヌニ猶山裏ヲ奉リシ仙人ハ如何ナル仙人ニカト疑フヤウニテ奉リ給フ。」(四二九四)とある通り、仙人の意に用ゐられてゐるもの様である。その他万葉における「仙」(三、三八五)「仙人」(九、一六八二)等の字面はヤマビトと訓んで誤りではなからう。

大言海によれば(一)仙人(二)山里ノ人(三)山賤樵夫ヤマツキコリとある。従つて又「花桜」における「やま入」も「仙人に用事がある」と言つてゐる人がある(清水泰氏評解)とか、「杣人に何か申そうと思ふと言ふ人が居る。」(山岸博士評解)とか解釈されてゐる訳である。殊に平安朝では古今集序に「薪負へる山人の花のかげに休めるが如し」とある如く山賤樵夫の意に用ゐるのが一般である様である。源氏物語では先に掲げた

山人の赤き木実一つを顔に放たぬと見え給ふ御そば目などは
おぼろげの人の見奉り許すべきにもあらずかし。(末摘花)
とある末摘花に対する擲擲を込めた描写に用ゐられてゐるものと、更に一例の

藤ごろも霧けき秋の山人は鹿の鳴く音にねをぞ添へつる(夕霧)

があるが、これは小野の山里に住ひする少将の君が来訪の夕霧に對して答へた自己卑下の意に用ゐられてゐる語の様である。恐らく王朝人の間にあつて「やま入」とは杣・山賤と共に自己を卑下し、他を多少軽蔑した意味に使はれる場合があつたものと考へられる。従つてこゝの「やま入」も改まつた意味の仙人ではなく杣人と同義にやゝ洒れて用ゐられてゐるものであらう。特に「花桜」におけるこの前後の軽妙な筆致は、この「やま入」の意味に極めて好適であると思ねばならない。因みに山岸博士が「恋しい女人を私は『止む時もなく』思つて恋い暮らす意を通わしたのであらうか。」(評解)と述べられたのはやゝ行き過ぎではなからうか。

かく見て来ると、こゝの「山人」は一般の和歌での文芸的「山びと」といふよりは、やはり末摘花的な人物を念頭において用ゐてゐるのであり、夕霧巻の場合とは又別である。つまり末摘花がその荒廢した宿で貞節を持って源氏を待つてゐる状況を応用してある事は前後の関係から殆ど動かないものと見てよいであらう。即ち(2)及び(3)に掲げた源氏物語の蓬生及び末摘花巻の場面の影響はこの特殊な「やま入」といふ語彙によつていよゝ確定にされてゐるわけである。

次に従来しばしば問題となつてゐる語に「むらすゝき」がある。これは夙に藤岡博士によつて「むらすゝきの語時節にあはず」と指摘された様に、春の時節としてはやゝ不釣合ひである。従つてこの様な語にも別の作品よりの引用といふ事が考へられなくはない。併しこれは荒れた宿を暗示したものとされた山岸氏の説に従ひたい。源語柏木巻にも卯月の荒庭を叙するに

前栽に心入れてつくろひ給ひしも、心にまかせて繁りあひ、

一 村薄も頼もしげに広がりて虫のね添はむ秋思ひやらるるよ
り……
とある。つまりこゝの群薄は冬越しの枯れた叢、又は晩春の繁みの
いづれかであらうと思はれ、内容上さして気にすべき性質のもの
ではないと考へられる。

ともあれ、一つ一つの特異な語彙について考察を深めることは
それが典拠と結び付く可能性が生ずるので興味深い。否、一見あ
りふれた「夜深く起きにけるも」の「夜深し」にあつてさへも清
水泰氏による(1)に示した様な典拠が求められるならば、あなたがち
等閑には出来ないであらう。

二

以上述べた特殊な語彙から典拠の本態を把握する方法を「花
桜」の中の「小弓」といふ語に応用して見ようと思ふ。

少将が「日さしあがるほどに起き給ひて」後朝文の贈答をし
てゐる折しも「源中将、兵衛佐小弓もたせておはしたり」とあ
る。然るにこの小弓は爾後の文において少しも触れる所のないも
のである。つまり構想の域外におかれるべき性質のものである。
貞丈雜記に「小弓と云物は武器にはあらず揚弓なの如くたはぶれ
のもてあそび物也。」とあるから、強ひて考へれば、次に来る
「たはぶれつゝもるともにいづ」の「たはぶれつゝ」はこの小弓
を以て遊戯をしたとも解されない事はないが、それにしても
「つゝ」といふ二つの動作又は継続せる動作を意味する接続助詞
を以て「もるともにいづ」に接続させる事は少しをかくく感ぜら
れる。第一逍遙しつゝ小弓を射るとは考へられない。既に多くの

註釈書が「冗談に興じながら一緒に家を出た。」(土岐氏新釈)と
ある所以であつて、それは前の「さらばかひなくや」といふ中将
の君の言葉を中心にした連歌、及び和歌の諧謔的気分の余韻をそ
のまゝに継承した形と見てゐる。さすれば、いよ／＼この小弓は
影の薄れ行く体のものであつて、構想上からは遠ざかつてしま
ふ。こゝに小弓が特殊な語彙として考へられる理由があるのであ
る。

右の事は小弓なる語が原拠の作品から採取された部分に存し、
それが不消化なるまゝに偶然痕跡をとどめたものではないかとい
ふ疑義を懐かせるに十分である。そこで小弓の用例を検べる必要
が生ずる。王朝の文芸作品で小弓の記事があるのは蜻蛉日記等が
古い。即ち天曆十年六月・安和二年三月十日・天延元年二月十五
日の三箇所に見え、いづれも春から夏にかけての遊戯である。安
和二年のものには

中の十日の程に、此の人々たわわきて小弓の事せんとす。か
たみにいていとぞし騒ぐ。しりへの方の限りこゝに集りし
なす日女房に賭物乞ひたればさるべき物や忽ちに覚えざりけ
む佗びざれに青き紙を柳の枝に結びつけたり。……

とあつて、青柳に因んだ歌さへ出て来る。次には宇都保物語「楼
の上」・枕草子「にくきもの」及び「遊びは」等に見られる。や
ゝ後れて栄花物語三十一「殿上の花見」・古今著聞集・今鏡等の
散文や金葉和歌集・夫木和歌集等の詞書き等に散見する。併しこ
れ等の中に出て来る小弓はいづれも「花桜」の小弓と関係づける
ことは困難であつて、典拠関係を搜索する立場においては公算の
最も高いと考へられる源氏物語を後廻しにする事は出来ない。

源氏物語には三箇所小弓といふ語が出て来る。即ち

(イ) 今朝大将の物しつるはいづ方にぞ。いとさうさうしきを例の小弓射させて見るべかりけり。(若菜上)

(ロ) なほ此頃のつれづれにはこの院に参りて紛らはすべきなりけり。今のやうならむ暇のひま待ちつけて花の折過ぐさず参れと宣ひつるを春惜しみがてら月のうちに小弓持たせて参り給へ。(若菜上)

(ハ) 左右の大將さる御中らひにて参り給へばすけたちなど挑みかはして小弓など宣ひしかど歩弓の勝れたる上手どもありければ召し出でて射させ給ふ。(若菜下)

である。右の三つの部分はいづれも「若菜上」の終りから下の始めにかけて集中されてゐるのである、といふよりはこの小弓は同一物を指してゐると考へてもよいであらう。(イ)は源氏の六条の邸に三月のうららかな日、螢兵部卿宮と柏木衛門督とが遊びに来て、源氏もこれに応待し、折から父の殿に来合はせてゐた夕霧大将を加へて三人に小弓を射させて見るのだつたと述べてゐる所である。この時は小弓の遊戯は行はれなくて蹴鞠があり、例の猫の一騒動から柏木が女三宮を簾の陰に仄見る場面が後に続く訳である。(ロ)はその後小宴あり、夕霧と柏木同車して帰途につく際の對話であつて、柏木の言葉である。「あなたの父君も花の散らぬうちにもう一度おいでとおつしやつた事だから月の内に小弓を持たせて出ておいでなさい。」と約束してゐるのである。(ハ)はその約束の三月晦日の会合には小弓は行はれず徒弓に臨時変更されたといふのである。まことに不幸な小弓ではある。

一 体小弓の競技は先にも触れた様に春に行はれるのが通例であ

る。小弓肝要抄には

稽古以春被賞観者也。おほかた日うららかに風しづかならば可成其興但ものしむ事は晩景也。(一時節事)

とあつて、特に春の夕暮れ近き頃を好しとした様である

ともあれ、こゝで注意しなければならぬのは、この小弓の条こそ「花桜」の小弓、及びそれ以後の情景と関連のありさうな事である。先づ小弓の遊びが源語においてもうやむやに終つてゐる事である。源語では、結局小弓の会は行はれなかつたとその結末を明かにしてあるわけであるが、「花桜」はそこまで結末をつける周到さを持ち得てゐない。つまり寄せ集めの短篇であればこそこの様な不合理も承認され得る訳であらう。

それよりも、更に面白く感ぜられるのは、この「三月ばかりの空うららかなる日」にやつて来た兵部卿と柏木の二人である。これは「花桜」における源中将と兵衛佐ではなからうか。さればこそ「小弓もたせて」等といふ句が挿入されるのではなからうか。但し「花桜」では源中将と兵衛佐は少將の邸に来訪し連歌及び歌を詠み合ふのである。これは先にのべた「花桜」の中間部(第二部前半)である。併し第二部後半に入るや再び源語の構想に戻る。即ち源氏の六条院は「花桜」の殿となつてあらはれ、従つて又夕霧も既に到着してゐる訳ではなからうか。即ちこの部分では少將が夕霧大将の立場におかれるわけである。のみならず時はどうであらう。蹴鞠の中にやがて夕方になつて「えならぬ花の蔭にさまよひ給ふ夕ばえいと清げなり」と描写され、更に「故ある庭の木立のいたく麓みこめたるに色々のひもときわたる花の木どもわづかなる萌黄の蔭に……御階の間に当れる桜の蔭によりて人々

花の上をも忘れて心に入れてゐる」のである。その時夕霧はどうであつたか、

大将の君も御位の程思ふこそ例ならぬ乱りがはしきかなと覺ゆれ。見る目は人よりけに若くをかしげにて核の直衣のやゝなえたるに指貫の裾つかたすこしふくみて気色ばかり引あげ給へり。かるくしうも見えず。物清げなる打解姿に花の雪のやうに降りかゝればうち見あげてしをれたる枝すこし押し折りて御階の中のしなな程に居給ひぬとある。

これは申すまでもなく、乱りがはしき蹴鞠の場にあつても夕霧の態度はくづれることなく、核の花の萎れた枝などを折つて階の際に立つてゐる姿は立派なものであつたといふ讚辭である。こゝは「花核」における少将への讚辭に相当する。即ち

夕方とのにまうで給ひて暮れゆくほどの空いたう霞こめて花といおもしろく散り乱るるゆふばえをみすまきあげてながめで給へる御かたちはん方なくひかりみちて花のほひもむげにけおさるゝ心ちぞする。

といふ男性礼讚の一節である。因みに蹴鞠と小弓とは屢々同時に行はれることがあり、時節がら関係深い競技であつたらうことは古今著聞集(卷九弓箭第十三)に

長曆二年三月十七日殿上人十余人野の宮へ参りたりけるに御殿の東庭に畳を敷きて小弓の会有けり又蹴鞠も有けり夕に及びて膳をすゝめられける。……

とある事によつても分かるのであるから、実は小弓の競技は「花核」の場合殿の屋敷において行はれたと見るべき筋合ひのものと考えられるのであるが、ともあれこの話から発展して来て非常に

相似た場面が展開するのはあながち偶然とは思へない。しかも若菜巻では柏木の女三宮への恋情がその裏に秘められ、次の瞬間猫の騒ぎでクライマックスに達するのに対し、「花核」における少将には「かのみつる所たづねばや」の心が燦ぶつてゐて、「花のちる夕映えをながめで給ふ」ばかりである。たゞ「花核」では蹴鞠が行はれてゐない点が異なるのみである。特に源語「若菜上」では夕霧大将が核の枝を折つたとあるからいよいよ「花核折る」といふ題名にふさはしきものを感じさせるのである。この様にして「花核」第二部は後半の「夕かた殿にまうで給ひて……花のほひもむげにけおさるる心地す」まで「若菜上」における蹴鞠の場面が喰ひ込んでゐるものと考へられる。

三

「花核」における次の場面(第二部後半)は少将の琵琶の彈奏である。

琵琶を黄鐘調にしらべていとどやかにをかしくひき給ふ御手つきなどかぎりなき女などもかくはえあらじとみゆ。この方の人々召し出でてさま／＼うち合はせつゝあそび給ふ。みつすゑいかゞ女のめで奉らざらむ……

と更に讚美の詞はつきない。併しこゝは「若菜上」では趣きを異にする。蹴鞠が終つて対の南表で小宴があり、やがて一同解散するのであるが、その間にも柏木の女三宮への思慕は懊惱となつて執拗に纏繞する。即ちこゝにおいて「若菜上」と「花核」との類似性は一往打切られるのである。

そこで想ひ出されるのは一に示した撰取(類似)点(6)である。

狭衣物語卷四の上に移る。周知の如く狭衣大将は桜を折つて齋院源氏宮を訪ね

みかきも野辺の霞もはかなくて折らですぎゆく花桜かなと告白すれば、齋院の侍女新少将は

花ざくら野辺の霞のひまひまに折らでは人のすぐるものかはと答へるのであるが、こゝが花桜折る少将の題名の典拠であるとさへ推定されてゐる。それはともかくとして、次には散り来る桜の下での蹴鞠である。こゝに又源語「若菜上」の蹴鞠を髣髴たらしめる場面が展開する。柏木の如き上手は宰相中将であり、夕霧大将に相当する人物は云ふまでもなく狭衣大将である。

やゝもすればおりたちぬべき心地こそすれ。などて今しばしは若くてあらざりけむ。

といふ言葉はむしろ大殿源氏の君の

かばかりの齡にてはあやししく見過す口惜しく覚えし業なり。

さるはいと軽々なりやこの事の様よ。
に相当するのであるが、次には

うち笑み給へるあいぎやうは花のにほひよりもこよなう勝りたまへり。花のいたう散りかゝるを見給ひて「かうりたまかへりてあととなるはふかし」と忍びやかに口ずさび給ひて勾欄におしかり給へるまみけしき御声などは、かの「桜はよぎて」として、花のしたにやすらひ給へりし御様を、その折はをかしと見しかどこの御ありさま類なげにぞ何事の折にも見ゆる。

といふ讚辭が投げかけられるのは夕霧と同じ趣向である。こ讚の辭の中には「花桜」の「花のにほひもむげにけおさるゝ心ちぞする」に似た「あいぎやうは花のにほひよりもこよなう勝りたまへ

り」があるし、更に「花桜」の第二部「花の木どもの咲きみだれたるいと多く散るを見てあかて散る花みる折はひたみちに」と奇しくも似た「花のいたう散りかゝるを見給ひて……」等といふ箇所が含まれてゐる。

この蹴鞠が終ると既に掲げた如く「日暮れぬれば皆のぼり」で殿中に入り管絃の遊びに移る。樂器は「花桜」の琵琶に対して琴であつたが、狭衣は

たゞ扇うちならして「さくら人」うたひたまふ御声のおもしろさに勝ることなかりける。

であつて、こゝにも簡単なが讚辭が挿入されてゐるのである。たゞ「若菜上」及び「花桜」では背景が大殿の邸であるのに「狭衣」では齋院である事はやゝ異なるし、更に「小弓」といふ語は「狭衣」では全然出て来ない。右の様な諸点からすれば「花桜」は「若菜上」の影響を直接に多く蒙つてゐるといふ感がする。即ち物語構成の力量にやゝ劣る作者が源語の「若菜上」を模倣し之を剪取したのであるが、十分に構想を纏め上げることが出来なかつたものと考へられる。しかもその不消化物を含むした荒削りの構想を焼きなほして、不用物(例へば小弓)を棄てて、やゝ巧妙に組立てたのが「狭衣」巻四上的一部分ではなからうか。少くとも「狭衣」の影響ばかりから「花桜」のこの場面が生れたと見るならば、何故に源語においてさへも余り重要でない小弓といふ語をわざ／＼再登用する必要があらうか、この点が不可解である。

四

さはあれ、狭衣物語巻四上と「花桜」が何等かの典拠関係を有

したであらうことは、既に指摘されてゐる通りであつて、本稿一における文章の比較(6)に掲げた所である。こゝは土岐氏が示された如く、辭句の上にも、酷似の箇所であるが、更に管絃の遊びが終了した後、狭衣大将が宰相中将の家を過ぎ、故式部卿宮の北方を垣間見る条は、「花核」における管絃の琵琶が端緒となつて、みつすゑ(「狭衣」では道季)の仲介により、源中納言の姫君に近づかうとする少将と撥を一にする。特に狭衣大将はこの時、自分の相手を宰相中将の妹にあたる姫君として近づいたのであつたが、最初の女性性は実は姫君の母であつた訳で、これが「花核」において、姫君を祖母なる尼君と取違へて連れ出した少将と構想上同一の形態を持つてゐる所とされてゐる。

併しもう少し後戻りをして考察するに、この狭衣大将の宰相中将の屋敷を過ぎるあたりは、「花核」でいへば、むしろ第一部に相当すると見られはしないだらうか。即ち「狭衣」の

なぞやかくよしなしありきも数つもればいとあるまじき事ぞ
かとおぼし出づれば、物すさまじうなりて、引かへす心地
し給へば、しばしおし留めさせ給へるに、築地所々くづれて
花のこずゑどもおもしろう見入るゝ所あり。

は「花核」の

思ふらむ所いとほしけれど立ち帰らむも遠きほどなれば……
所々の花の木どももひとへにまがひぬべく霞みたり。……築
地の崩れより白きものゝいたう咲きつゝ出づめり。

とある「やすらひ」の気分と相通するものを感じさせるではないか。それよりも更に相似の点は、次に所謂垣間見の場面が共に展開する事である。併しこの垣間見は、狭衣の場合、源語の「若

紫」におけるそれである。結局狭衣大将はこれが動機となつて、その姫君を奥方とする事になり、源氏君は紫上を畢生の伴侶に持つ訳になる。「帳の前に脇息におしかゝり絳よむ故式部卿宮の北方は三十に足らぬほど」と描かれてゐるが、これが「若紫」では「脇息の上に絳をうち置きていとなやましげに読みぬたる尼君四十あまり」である。つまり「花核」においてみつすゑが少将に

こ源中納言のむすめになむ。まことにをかしげにぞ侍るなる
かの御をぢの大将なむむかへてうちにたてまつらむと申すなる。

と語つたその姫君にあたる人は「狭衣」では故式部卿宮を父とする人、「若紫」の紫上は兵部卿宮を父とする人である。更にみつすゑに語つた童のことばによれば

大将どののつねにわづらはしく聞えたまへば、人の御ふみつ
たふることだにおほうへいみじくの給ふものを

とあるが、このおほうへ(祖母)は「狭衣」では姫の母にあたり、「若紫」ではやはり祖母の尼君である。「花核」の場合は姫君の母北方の事が一切書かれてゐないが、これは「若紫」において紫上の母北方の事を故姫君として片付けてある如く、多分世に亡き人として取扱つてゐるものと考へたい。この辺の説明は、

「花核」では甚だ粗漏であつて、大将が母方父方のいづれに属するか不明であるし、従つて又「おほ上」もそのいづれに属するや明かでない。併し「若紫」の例に従へば、恐らく母方に当り、尼君に準へるべき人であらうと思はれる。即ちこのおほ上(おほ上)は「法師にさへなり給」うた人であり、「狭衣」における姫の母もやがて出家を遂げる人である。この様に見て来ると姫君に

対してその祖母がいづれも後見をして共に尼である点、「花核」における姫君は紫上に相似したものとなつてくる。こゝにおいて「花核」は「狭衣」よりも源語「若紫」に似てくる。

さればこそ少将は姫君を奪取しようとして車で出かけたのではなからうか。少将が姫君に近づく段は既に⑦において示した如く、帚木・空蟬巻における場面に相似してゐるといはれてゐるが猶⑧に示した

まろも同じ人ぞとてかきいだきて出でたまへば、だいふ少納言などこはいかにときこゆ。(若紫)

ふし給へるをかきいだきてのせたてまつり給ひてくるまをいそぎてやるに、こはなにぞ〜とて心えずあさましうおほさる。

とよく似た場面であらう。尤も「若紫」の尼君はこの時には既に世に亡き人ではあるが。

要するに、恋人である相手を取違へたといふ滑稽談は別段新味のある手法でもないが、空蟬や末摘花に対する源氏の失敗談の如き構想が作者の脳裡にあつて、これを紫上の場合に応用したもので、これが「花核」における独自の構想の部分であるともいへるのではなからうか。

この様に見て来ると、「花核」における垣間見も又「若紫」における垣間見に相似して来る。

をのこどもすこしやりてすいがいのつらなるむらすゝきのしげきしたにかくれてみれば(花核)

人々はかへし給ひて惟光ばかり御供にてのぞき給へば(若紫)

これも垣間見の状態としては当然さうあるべきであるが、似てゐる。しかもその垣間見た情景は共に姫を中心とした童女の世界である。

少納言の君こそあけやしぬらむいでて見たまへ。(花核)

髪ゆるらかにいと長く目やすき人なめり少納言の乳母とぞいふはこの子の後見なるべし。(若紫)

女房と乳母の相違はあるが同じ呼び名である。

「若紫」における少納言の乳母は後に活躍する人物であるが、花核の少納言の君はやゝ曖昧である。即ち、従来次に出現する「よきほどなるわらはのやうだいをかしげなる」は少納言の君その人であるとする説(清水氏旧説・松尾氏)と、弁の君と見る説(佐伯氏・土岐氏・山岸氏)があつたが、これは島田退蔵氏によつて指摘された様に、弁の君にとる方が自然であらう。さうなれば少納言の君は「おとなしき人」であつて、女房の頭となる訳である。ともかく注目すべき名前であると思ふ。

いたうなへすぎてとのみすがたなるすわうにやあらむ(花核)
白き衣山吹などのなれたる着て走り來たるをんな子(若紫)
前者は女房、後者は紫上であるが、

きぬぬぎかけたるやうだいさゝやかにいみじう子めいたり。

(花核)

十ばかりにやあらむと見えていはけなくかいやりたる顔つきかんざしいみじう美し。(若紫)

少女である紫上と若い姫君の形容であるから当然かもしれない。

うれしくも見つるかな。(花核)

さてもいとうつくしかりつるちごかな。(若紫)

少將及び源氏の歎声である。

やうく／＼あくれば帰り給ひぬ。(花桜)

……とて立つ音すれば帰り給ひぬ。(若紫)

偶然、あるいは当然のことかもしれないが、以上の様な類似の語彙を見受ける。

*

道草を喰つてゐる間に結論を与へる機が熟したやうに思ふ。嘗て始めて「花桜」を通読した際、祖母にあたる尼君を姫と間違へて連れ出したといふのは若紫巻の滑稽化ではないかと直感したことであつた。直感は根強いものであり、得てして誤謬のもともなりやすいのであるが、今に及んでも「花桜」における「若紫」的要素はその構想の骨格となつてゐると敢へて云ひたい。しかもその骨格に空蟬や末摘花等の情緒が肉付けされたものと考へたい。但し骨格は中央部において脈絡が断たれてゐるが、その間を「若菜上」における六条院蹴鞠の場面を応用して接着させてあるやうである。この様に見て来ると「花桜をる少將」の源流は「しをれたる桜の枝を折つた夕霧大将」に溯れる事になる。浅野家旧蔵の十巻本では題名が「花ざくらおる大将」となつてゐるのもその様な関係からかも知れない。

「花桜」の一篇が文章として統一を欠いてゐることも既に述べたが、第一部と第二部前半が抒情的でやゝ冗漫、従つて又不可解なる点の多いのはやはり先行文芸を多分に剪裁して、そのまゝ踏用した為であらうと思はれ、第二部後半及び第三部琵琶弹奏以下に至つて構想が引張り専ら叙事的に急展開するのは、そこに多少なりとも作者の創作的力量を發揮し得た結果に他ならぬと思ふ。

一篇の中に点在する「やま入」・「みつとを」・「小納言」・「小弓」・「おほ上(おぼ上)」等の語彙はその間の事情を物語る痕跡であらう。源氏物語・狭衣物語・花桜折る少將、この三者の關係は右の語彙、なかんづく「小弓」・「おほ上(おぼ上)」等の由来及び性格を勘案した場合、猶源語から直接「花桜」への感が深い。

一九五五・二・五

註1) 倉野憲司博士 このついで(國語と國文学 昭一五・八) 同

逢坂越えぬ権中納言——源語から抜出た薫君——(文学 昭

一四・四)

2) 佐伯梅友博士 堤中納言物語(新註國文学叢書) 解説一七
べ参照

3) 藤岡作太郎博士 國文学全史平安朝篇(六三九頁)及び李

花亭文庫本書き入れ(土岐武治氏紹介)

4) 吉田精一氏 花桜櫻折る少將について(攷昭九・九) 現代

語訳日本古典全集附録にも同氏の同様な解説がある。

5) 藤岡博士 國文学全史平安朝篇及び李花亭文庫本書き入れ

島田退藏氏 花桜をる少將(國文学 昭二八・八) 三二頁以

下参照

7) 前記李花亭文庫本書き入れ等

8) 土岐武治氏 「花桜折る少將」考(平安文学研究第一輯 昭

二四・一〇) 二〇頁以下参照

9) 右一九頁・二〇頁参照

10) 右二一頁参照

11) 島田退藏氏 花桜をる少將三五頁参照 猶、清水泰氏は近

著堤中納言物語詳解において改められた。